

たがう。

- (14) 三三五、三三五八、三三七六など。
- (15) 二〇〇四、二〇一二(七夕)
- (16) 二三八九、二四二一、二四六六など。
- (17) 三四七〇
- (18) 二五三八、二五三九、二六一三など十五首ほど。
- (19) 二八六四、二九二九、三〇〇八など十五首ほど。
- (20) 五二七、六一九
- (21) 五八八、五八九
- (22) 三九四一
- (23) 三七四七
- (24) 四三一一(七夕歌)
- (25) 他に八六七、一八〇〇、四三三八、四四二二。旅をあらわすと考えられない例は三例ほど。
- (26) 他に九九三、二三三四、二三四七。
- (27) 他に二〇三八、二〇三九、二〇七三、二〇七九、四一二七。
- (28) 折口信夫「抒情詩の展開」(『折口信夫全集・第八卷』〔中央公論社 昭和四二年六月新訂版〕二六八―七一頁)
- (29) 三八二―三、一七五三―四、一七五七―八、一七五九―六〇など。
- (30) 三三五六など。
- (31) 二〇七―一二、二二三―六、四六六、四八一、三六九―三など。
- (32) 集中五十例あまり。
- (33) 土橋寛注2 掲出論文「万葉」一二二―三
- (34) 澤瀉久孝「伝誦歌の成立」(『万葉集の作品と時代』〔岩波書店 昭和一

六年三月)八頁)

- (35) 折口信夫「恋及び恋歌」(『折口信夫全集・第八卷』〔中央公論社 昭和四二年六月新訂版〕二四五頁)
 - (36) 稲岡耕三注3 掲出論文
 - (37) 吉井巖「石之日売皇后の物語」(『天皇の系譜と神話』〔塙書房 昭和五一年六月〕三八一頁)
 - (38) 歌謡番号は『日本古典文学大系3・古代歌謡集』〔岩波書店 昭和三三年七月〕による。
 - (39) 折口信夫「石に出で入るもの」(『折口信夫全集・第十五卷』〔中央公論社 昭和四二年一月新訂版〕二五五頁)
 - (40) 大場磐雄「磐座・磐境等の考古学的考察」(『神道考古学論攷』〔雄山閣 昭和一八年一二月〕 参照。
 - (41) 大場磐雄注40 掲出著書二三四頁
- (付記) 小稿と趣旨を上代文学会の昭和六二年一月例会で口頭発表し、多くのご教示を得た。ここに記して感謝申し上げる。

時期や、女の待恋の情を表現する歌群の内容からみて、その成立は奈良朝のころかとおもわれる。

歌群の基幹をなす八五は、宮廷ないし貴族社会に伝わる悲恋譚の主人公・軽太郎女の歌を、語句を変えつつ、これもまた伝承される偉大な皇后磐姫の歌に仕立てあげたもので、そこにはひとつの趣向がある。そして、嫉妬深く強悍で断乎とした伝承の磐姫皇后像を、伝承とは異質な面をみせる夫に焦がれて迷う女性像として描き出した点に、さらなる趣向をみることが出来る。その際、イワの名にふさわしい断乎たる皇后像は、名のありようの束縛をとかれて、新たな女性像として創出された。

しかもかかる趣向をこえて、夫を恋う女性の心情をすぐれて表現しえたところに、八五の歌の生命力があつたとおもわれる。

注

- (1) 伊藤博『万葉集の構造と成立・上』(塙書房 昭和四九年九月) 九三頁、もと「磐姫皇后の歌」(『国語国文』二九四号(昭和三四年二月))。中西進『万葉集の比較文学的研究』(南雲堂桜楓社 昭和三八年一月) 六三三頁。三谷栄一「記紀から万葉集へ——万葉集卷二の冒頭歌をめぐって——」(『国学院雑誌』七〇巻一—号(昭和四四年一月))
- (2) 伊藤博『万葉集の歌人と作品・上』(塙書房 昭和五〇年四月) 九四—六頁、もと「トネリ文学」(『日本文学』一五巻一号(昭和四一年一月))。土橋寛「人麻呂と磐姫皇后の歌」(『文学』五二巻八号(昭和五九年八月))及び「磐姫皇后の歌」の再検討」(『万葉』一二二号(昭和六〇年八月))
- (3) 曾倉岑「イワノヒメ伝説の発展」(『五味智英先生遺稿記念』上代文学論叢) (桜楓社

昭和四三年二月) 一五四頁)。直木孝次郎「磐之媛皇后と光明皇后」(『赤松俊秀教授退官記念事業会 昭和四七年二月) 一七二頁)。
(赤松俊秀教授退官記念) 国史論集』(赤松俊秀教授退官記念事業会 昭和四七年二月) 一七二頁)。
 稲岡耕二「磐姫皇后歌群の新しさ」(『東京大学教養学部人文科学科紀要』六〇(昭和五〇年三月))

(4) 伊藤博注1掲出著書九二頁

(5) 稲岡耕二注3掲出論文

(6) 高野正美「類聚歌林」(『古代文学』六(昭和四一年二月))

(7) 伊藤博氏説により、五三番歌までとみる。(伊藤博注1掲出著書五六頁)

(8) 澤瀉久孝「山上憶良の生涯とその作品」(『万葉集講座・第一巻』(春陽堂 昭和八年二月) 一六一頁)

(9) 梶川信行「類聚歌林編纂の意義」(『語文』四一輯(昭和五一年七月))

(10) 第五句の「霜」については、実際の霜とみる説、白髪^のの喩とみる説の

二様の解釈があるが、小稿は後者による。

(11) 第四句は土橋寛氏の解釈(注2掲出論文「万葉」一二二号)にしたがい「何時ごろあたり」と訳す。

(12) 万葉集の「恋」とは、好きな人と離れていて孤り悲しむもので、逢えば消えるものであるとの伊藤博氏の指摘がある(『万葉集の表現と方法・下』(塙書房 昭和五一年一月) 二二八—九頁)。集中の「恋やむ」の用例中には「……夢にだに止まず見えこそ我が恋やまむ」(二九五八)、「……まそ鏡直目に君を 相見てばこそ 我が恋やまめ」(三三五〇)という表現がみえ、恋がやむためには(たとえ夢の中でのことにせよ)恋人と逢うことが必要であったことがしられる。第五句はこれを踏まえて解釈する。

(13) 卷四相聞の難波天皇妹の歌(四八四)や額田王と鏡王女の唱和の歌(四八八、四八九。卷8・一六〇六、一六〇七重出)は後代の仮託とする説にし

また、イワが堅固で長久な属性をもつものとみられていたことは、
 記紀の記事に指摘することができる。

たとえば、ホノニギノミコトとコノハナノサクヤビメとの婚姻譚
 においては、イハナガヒメとコノハナノサクヤビメの姉妹が、その名
 のイワと木の花に懸けて、醜く堅固で長久なもの、美しく榮えて短命
 なものとして対置される。ニギノミコトは醜いイハナガヒメとの婚
 姻を避けるが、もしヒメと婚姻したなら、「天つ神の御子の命は、雪
 零り風吹くとも、恒に石の如くに、常はに堅はに動かずまさむ」(『記』
 上巻。大山津見神の言)、「生めらむ児は寿永くして、磐石の有如に常
 存らまし。」(『紀』神代下第九段第二の一書。イハナガヒメの言)と
 説明される。傍点部から、イワを堅固、不動、長久、不変なものとも
 ていることがしられる。

神功皇后の新羅遠征記事のなかには、千熊長彦と百済王が古沙山に
 登るくだりがある(『紀』神功皇后撰政四九年三月)。そのとき百済王
 が磐石の上で盟約したことばに、「もし草を敷きて坐とせば、恐るら
 くは火に焼かれむことを。また木を取りて坐とせば、恐るらくは水
 の為に流されむことを。故、磐石に居て盟ふことは、長遠にして朽つま
 じといふことを示す。」とある。草木のうつろいやすさに対して、イ
 ワの長久、不変性が盟約を保証するのである。

堅固で長久であるという属性をもつイワは、そのゆえに二者の間に
 置かれたときは二者を断絶する働きを有するともみられたようであ
 る。イザナキノミコトがイザナミノミコトを絶縁する条にあらわれる
 チビキノイハ(『記』上巻。『紀』神代下第五段第六の一書)にはそう
 した働きがみてとれる。これは千人がかりで引くような巨岩であるが、

巨大であるだけでなく、堅固で長久であるというイワの属性が二神の
 絶縁を確乎たるものにしたと考えられる。大場磐雄氏は、このチビキ
 ノイハを、イワが悪霊を防御する威力をもつものと考えられたことの
 例と指摘している⁴¹⁾。

伝承上の皇后磐姫の基本的なありようは、以上のように、靈威を有
 し堅固で長久であるイワの性格に支えられたものとみることができ
 る。靈威をもつ神聖なイワの名を冠する磐姫が、有徳の天皇仁徳の皇
 後の地位にあるのは相応のことである。激しい気性の生み出す断乎た
 る意志は、イワの堅固で長久な属性に通じる。伝承される基本的な磐
 姫像の半ばはイワの性格と相通じて考えうるが、名に性格があらわれ
 ること、あるいは逆に性格が名としてあらわれることは、前に引いた
 イハナガヒメとコノハナノサクヤビメを含め、多くの例のあるところ
 である。

六において述べたが、嫉妬深く気性激しく断乎とした皇后磐姫を、
 夫に焦がれて迷う女として描いたところに八五の趣向があった。その
 際、磐姫の名にふさわしい存在であった伝承上の皇后の姿は、名と性
 格とが互いに規制しあう古代的なありかたから脱け出て、磐姫の名の
 ありようとは離れた女性像に創出されたと考えられる。

結

磐姫皇后歌群四首(八五―八八)は、磐姫を待ちつづける女として
 描き出す。歌群の成りたちには、八五単独の段階と、八六―八八が加
 えられ連作をなした段階とが推定される。八五左注の類聚歌林の編纂

りることになったのである。

ついで下三句において語句を変えつつ、待つことを拒否し、迎えに行く意を決した激しく行動的な軽太郎女の姿を、迎えに行こうか待ちつづけようかと焦れつつ迷う磐姫の姿に再生する。原歌のおもかげをのこしつつ、歌の主を変え心理表現を変えて、新たな歌に生まれ変わらせるとき、原歌をしる享受者には二重のおもしろさがあるはずで、そこに八五の趣向があったとおもわれる。

六、記紀と八五の磐姫像

しかも八五に描かれた磐姫像は、当時しられていた磐姫皇后像とは異質な面をみせるものであった。

吉井巖氏が論じたように、記紀の磐姫像には質的な相違があるが、一方、記紀に共通した磐姫像をみいだすことも可能である。³⁷⁾

記紀ともに、磐姫は八田若郎女（八田皇女）と天皇との関係がもとで宮に戻らず山背に赴くが、その出奔にもかかわらず、皇后として生活を完うする。天皇への愛情は、物語中の歌謡（記五七、紀五三³⁸⁾）に読みとりうるが、天皇と磐姫との愛情物語は表面に出ない。磐姫は一貫して天皇と他の女との恋をさまざまに存在である。その性質は嫉妬深く、気性は激しく意志は強固である。このような記紀に共通する性格は、当時伝えられ受けとめられた基本的な磐姫像が、嫉妬深く強悍な断乎たる皇后像であったことを推測させる。

対して八五の磐姫は、夫を迎えに行こうか待ちつづけようかと焦れながら迷う心の翳を歌う。恋情の激しさはみとめられるが、嫉妬の相

はここにはない。断乎とした皇后像というよりもむしろひとりの女性として、夫を恋する姿をみせているというべきである。こうした造形は記紀の記述にはあらわれないところであり、当時の伝承上の基本的な磐姫像とは異質な面を感じさせる。

従来、記紀と万葉の磐姫像に異質さのみとめるか否かについては見解のわかれるところである。後者の見解の底には、「記紀の歌を織りこんだ物語は皇后の天皇にむけられた強い嫉妬を中心として編まれて居るが、それは深い愛情に基づくものであらうから、此所に上げられるやうな相聞の作の存することも亦自然であらう。」（土屋文明『私注』）のように、愛情と嫉妬を表裏一体のものとみる考えがあるとおもわれる。たしかに男女間の愛情と嫉妬は切り離せないものかもしれないが、記紀と万葉の磐姫が、それぞれ異なる一方の面を強調する形となつていることをみすごすわけにはいかない。嫉妬深く強悍で断乎とした伝承上の皇后像の、嫉妬深さや断乎たる相を切り捨てて、夫に焦がれて迷う女を描き出した点に、八五のさらなる趣向があったと考える。

七、磐姫という名

ところで、あまり注意されることがないようだが、当時の伝承上の基本的な磐姫皇后像は、その名に冠された「イワ」のイメージと抜きがたく結びついており、おもわれる。

折口信夫氏は、イシに魂の籠もる場合をイワというものと考えたが、神の降臨する座としての磐座や、神聖な区域を石で示す磐境³⁹⁾の例が示すように、イワは靈威をもつ神聖なものと観じられてもいた。

えはない。磐姫が旅に出た夫を迎えるために山道をたどるのは避けられぬことで、平地に行くことができたのにわざわざ山道を行ったということではないようにおもう。

以上を通してわたくしは、八五の内容を次のように考える。——夫が旅に出て日数が積もった。逢いたい気もちがつのる。夫が行き帰りに越える山道を、どのあたりにいるかしれない夫をさがしつつたどって迎えに行こうか。それともこのままここで待ちつづけようか。

新古の宮廷歌謡を収めたとみられる卷十三の相聞には、旅行く君を待つ女の歌と考えることのできる長歌・反歌の組が三組ほど存在する（三二五〇―二、三三九一―二、三三二八―二）。宮廷人にとって旅は身近な体験であったが、その裏には旅行く夫を待つ妻たちが存在した。そうした妻の悲別歌や旅中の夫を恋う歌は、宴席などでも披露されることがあったろう。宮廷人の共感を得る性質の歌であるゆえ、流布したこともおられる。そのような事情を背景に、卷十三の旅行く君を待つ女の歌は存在したと考えられる。そして、旅中の夫に恋い焦がれて迷う磐姫の八五番歌は、まぎれもなくそうした宮廷を中心とする社会で生み出され、享受されたものと想定されるのである。

五、軽大郎女から磐姫へ

八五の成りたちをめぐって問題となるのは歌句の類似する九〇の存在である。八五と九〇の先後関係については、澤瀉久孝氏が「古事記に既に「此云山多豆者是今造木者也」と注を要する程に、耳なれない「山多豆乃」といふ言葉が、「山尋ね」と誤られ、或は、改められ、

皇后の御作として万葉の編纂者に伝へられたものと考へる事が穩かではなからうか。」と述べ、九〇から八五へ、という道筋を示した。稲岡耕二氏は、八五の「山たづね」を「魂こひ」の習俗の反映とみて「山たづの」よりもむしろ古いと考える折口信夫氏の説を、折口の八五と九〇の解釈の矛盾をつきつつ批判し、澤瀉説を承ける。そして、枕詞「山たづの」を支える古代人の意識は迎えること・逢いうることへの確信ゆえ、八五の逡巡遲疑する下句表現には無縁とみて、発想が「迎へを行かむ」から「迎へか行かむ」に変わるとともに「山たづの」も「山たづね」に変わらざるをえなかったと論じた。九〇から八五への変化は、九〇の「古代的な性格を一気に払拭するような形で、大幅に且つ本質的になされたのだろう」という感が深い」と稲岡氏は述べるが、したがうべきものとおもう。

さて、このようにして八五が生み出されたとすれば、そこにはまさしくひとつの趣向が存在する。すなわち、軽大郎女（『記』の当該部の記述では衣通王）の歌（九〇）を語句を変えつつ磐姫の歌（八五）に仕立てあげたことである。

磐姫の上二句は、夫が旅に出て日のたつことをあらわす歌いぶりだが、これは軽大郎女の上二句を受け継いだ結果である。軽大郎女は紀紀ともに伝える同母兄軽太子との恋愛事件の女主人公である。古事記によれば、軽太子が伊予湯に流されたのち、恋しさに耐えきれず太子を追って行く。そのとき大郎女が歌うのが万葉集に引く「君が行き……」（九〇）の歌であり、二人は再会後に自殺する。軽太子の伊予流謫もまたひとつの旅であり、太子が流されて日のたつことを歌う大郎女の上二句を借用した磐姫歌は、夫が旅中にあるという情況設定も借

ひるがえって八五をみると、第三句「たづね」という行為の目標となるのは第一句の「君」であり、その居所は明確でないものと考えらるべきであろう。

では次に、「山たづね」の「山」とは何か。磐姫はなぜ山をたづねるのか。これも万葉集の例に照らして考えたい。下三句が上二句を承ける以上、第三句の「山」は何らかの意味で上二句の内容を承けている可能性がある。その際、契沖の「山たづねは、みゆきしたまひし山ちをたづねてなり」（『代匠記』初稿本）という指摘が顧みられるべきであるとおもう。人が山に入り、山道を行くことが歌われる集中の例を参照すると、(1)山あそび・儀礼的登山²⁹ (2)恋人のもとに山路を通う³⁰ (3)死者の埋葬及び死者が山に赴くという観念³¹などのケースがあげられるが、もっとも例の多いのは、さまざま旅の途中に山越えをするばあいである。うち数例をあげる。

……この道の 八十隈ごとに 万たび かへりみすれど いや遠に
里は離りぬ いや高に 山も越え来ぬ 夏草の 思ひしなえて 偲
ふらむ 妹が門見む なびけこの山（巻2・一三一 柿本人麻呂）
四極山うち越え見れば笠縫の島漕ぎ隠る棚なし小舟（巻3・二七二
高市黒人）

朝霧に濡れにし衣干さずしてひとりか君が山路越ゆるむ（巻9・一
六六六）

あしひきの山路越えむとする君を心に持ちて安けくもなし（巻15・
三七二三 狭野弟上娘子）

こうした例は、山（山路・山坂）を「越ゆ（うち越ゆ・ふみ越ゆ・越え来・越え行く）」ということばで表現されることが多い。山越えは

旅の目標の地に至るために通らねばならぬ苦しい行程であった。

八五の上二句が、夫が旅に出て日のたつことを表現したものとすれば、その旅は、多くの旅がそうであったように、行程中に山越えを含むものと観じられていたのではないだろうか。「山たづね」の「山」は、ことばの面にこそあらわれないが、目標地に着くために夫が越え行き、再び越え来るはずの山を指示するとみることができているのではないかとおもう。

土橋寛氏は「山たづね」を天皇を迎えに行く旅の被虐的心情の表現とみて、「人麻呂歌集の「山科の木幡の山を馬はあれど徒歩より吾が来し汝を念ひかねて」（巻11・二四二五）と同様、天皇を迎えに行く旅は、平坦な道を馬に乗ったり輿に乗ったりしての物見遊山的な旅でなく、峻しい山路（傍点壬生）を辿っての苦行の旅でなければならぬ、というのが皇后の「歌の心」なのである。」と述べる。氏が「山たづね」の「山」を「峻しい山路」といわれるのは、八六の「高山の磐根し枕きて」をひき出すものとしてとらえるゆえであろう。八六の「高山」という表現は、たしかにふつうの山ではなく、高く峻岨な山を意味するだろうが、単に「山」というばあいはそこまで読みこむべきだろうか。どのあたりにいるかわからない旅中の夫をさがしながら迎えに行くのに、山越えは避けることができぬ。「山たづね」はそういう筋あいから出たことばで、かならずしも被虐的表現と解さなくてもよいのではないか。

また、土橋氏の引く人麻呂歌集の「馬はあれど徒歩より吾が来し」（二四二五）は、女のもとに通うのに楽な方法をとらず、わざわざ辛い徒歩で来たことを訴える被虐的心情表現だが、八五にはそうした訴

で家郷の人が恋しい、といった表現 (c) (d) (e) (f) 波線部) から看取されるように、親しい人とあわずに日を重ねたときには、相手を希求し、あいたいと願うものである。ことばでじかに表現されてはいないが、上二句のなかにそうした心情を読みとっておかないと、下三句の解釈がゆきとどかない。逢いたい心がつのるからこそ迎えに行こうか待ちつづけようかと焦慮し、迷うのである。迎えに行くのも待ちつづけるのも思う人と逢うための手だてで、その先にあるものは再会でなければならぬ。その意味で八五は、旅に出て日のたつ夫と逢うことを願い、焦慮し、迷う歌ととらえるべきである。

四、八五の解釈(2)

第三句「山たづね」は問題を含むことばである。折口信夫氏は八五を「魂ごひの歌」と解釈した。魂ごひは「死者の招魂にも、生者の招魂(恋愛祈願)にも適用」するといひ、「山たづね」とは、重病者や死人などの霊魂が近辺の山の磐群の中に至り留るあり所をつきとめ、山の巖屋あるいはその途中まで行って呪術を行うことだが、「自分の方へより来ぬ、怨しい人の心をと戻す為にも、こんな呪法を以つて魂を招き、其と共に人を迎へたのであらう。」と述べている。だが、恋愛祈願のために山で呪術をおこなうことの傍証は引かれていない。そうした用例が他に指摘できるのだろうか。

小稿はことばに即して解釈をこころみたい。まず「たづね」という語の意味あいを探ろう。八五のほか、集中には次の五例の「たづね」がある。

① 遠妻し高にありせば知らずとも手綱の浜のたづね来なまし (巻9・一七四六 高橋虫麻呂歌集)

② 年にはに鮎し走らば辟田川鶴八つ潜けて川瀬たづねむ (巻19・四一五八 大伴家持)

③ 叔羅川瀬をたづねつつ我が背子は鶴川立たさね心なくさに (巻19・四一九〇 家持)

④ うつせみは数なき身なり山川のさやけき見つつ道をたづねな (巻20・四四六八 家持)

⑤ 渡る日のかげに競ひてたづねてな清きその道またも会はむため (巻20・四四六九 家持)

これらを通じて注意すべきは、「たづね」という行為が到達すべき目標をもっておこなわれること。目標のありかはあらかじめ明確でなく、たずねた末に到達しようということである。①では妻、②③では鮎、④⑤では悟りが「たづね」行為をひきおこす要因、いいかえれば「たづね」の目標である。ところが目標の所在が明確というわけではないので、そこに至るまで、高への道(①)、川瀬(②③)、仏道(④⑤)をたどって行くのである。しかもすんなりと目標に達するわけではなく、その間一歩一歩たしかめ探しながらたどり行く、という意味あいがあるようだ。

仏足石歌にも「この御足跡をたづね求めて善き人の坐す国には我も参てむ諸を率て」の例があるが、これも万葉集の用例と同様に考えられる。善き人の坐す国(極楽浄土)のありかはあらかじめわからないが、その目標に仏の足跡(仏道)をたどりつつ到達しようというのである。

八五の検討をこころみることとする。

二、八五の解釈(1)

はじめに語句の検討を通して八五の解釈をこころみたい。

第一句の「行き」は、集中では左のようにさまざま旅をあらわす例が多い。

吾が行きは久にはあらし夢のわだ瀬にはならずて淵にありこそ(卷

3・三三五 大伴旅人 大宰帥としての筑紫赴任)

……吾が背子が 行きのまにまに 追はむとは 千度思へど……

(卷4・五四三 笠金村 紀伊国行幸従駕の旅)

吾が行きは七日は過ぎじ竜田彦ゆめこの花を風にな散らし(卷9・

一七四八 高橋虫麻呂歌集 難波下行)

第二句の「日長し」は日数を経る意である。

相見ずて日長くなりぬこのころはいかにさきくやいふかし我妹(卷

4・六四八 大伴駿河麻呂)

恋ふる日の日長くしあればみ園生の韓藍の花の色に出でにけり(卷

10・二二七八)

眉根搔き誰をか見むと思ひつつ日長く恋ひし妹に逢へるかも(卷

11・二六一四或本歌)

右のように、恋人(夫・妻)や縁者、知人とあわずに日を重ねたばかりに使用されることばである。また地上の男女のみならず、七夕歌においても、彦星と織女星が逢えずに重ねる一年の日数を「日長し」と表現する例がある(卷10・二〇一六、二〇一七他)。

そして、知人や恋人と長くあえない状況は、旅によってもたらされた。左は、旅の日数を重ねたことを「日長し」という語にあらわした例である。

①宵に逢ひて朝面なみ名張にか日長き妹がいほりせりけむ(卷1・六〇 長皇子)

②君が行き日長くなりぬ奈良路なる山齋の木立も神さびにけり(卷5・八六七 吉田直)

③印南野の浅茅押しなべさ寝る夜の日長くしあれば家し惚はゆ(卷6・九四〇 山部赤人)

④……こぎ廻むる 浦のことごと 往き隠る 島の崎々 隈も置かず 思ひそ吾が来る 旅の日長み(卷6・九四二 赤人)

⑤大君の遠の朝廷と思へれど日長くしあれば恋ひにけるかも(卷15・三六六八 阿倍継麻呂)

⑥……ま幸くて 我帰り来む 平けく 齋ひて待てと 語らひて 来し日のきはみ 玉ほこの道をた遠み 山川の 隔りてあれば 恋しけく 日長きものを 見まく欲り 念ふ間に……(卷17・三九五七 大伴家持)

以上のような例を見ると、上二句「君が行き日長くなりぬ」は、「行き」と「日長し」が重ねて用いられており、夫が旅に出て日数を経た、といった状況をあらわすものと受けとれる。後述するがこの上二句は、恋人である実の兄が配流の旅に出た後に歌われた軽太郎女の歌(九〇)の上二句を受け継いだものである。したがって、軽太郎女の恋人に後れた女の情況も、磐姫に受け継がれている。

また加えていえば、「日長し」の用例中、旅や赴任が長くなったの

さて、歌林が同じ折りの一人の作者の歌数首をまとめて載せることがあったとすると、もし歌林編纂時に連作四首が成立していたなら、うち一首のみを採って残りを捨てたとは考えにくい。ましてや緊密な構成の連作であれば、まとめて載せるはずではないだろうか。歌林が磐姫の歌として一首を載せていたということは、すなわち、歌林編纂の資料において磐姫の歌が単独の存在であったことを意味するだろう。そして歌林編纂後に三首が加えられて連作をなしたと考えられる。

歌林編纂の時期については、憶良の「令侍東宮」（養老五年）時代とみるのが通説だが、その以前、慶雲四年から和銅末年頃までに編まれたとする説もある。通説にしたがえばもちろん、後者の説によっても、文武没年以後奈良時代に入っの連作の成立が推測される。そしてこの推測に立てば、連作の実作者を人麻呂とする説は成り立ちがたいことになる。

一一、待ちつづける女

ここで歌群の内容に目を転じよう。四首は磐姫を、夫と逢わずに日を重ね、恋情に焦慮しつつ夫を待ちつづける妻として描き出す。その恋情の推移は、

夫を迎えに行こうか、それともこのままここで待ちつづけようかと迷う（八五）。

こんなに恋しがつてなどいずに、いっそ迎えに出たまま行き倒れて、高い山の磐を枕に死にたいとおもう（八六）。

このままいつまでも、髪に白いものが混じるまでも夫を待ちつづけ

ようと心に決める（八七）。

いっごろあたり夫と逢うことができず恋心がしずまるのだからと嘆く（八八）。

と、迷い、焦慮し、決意し、嘆く、委曲を尽くしたものである。恋する女の心の揺れのそのときどきを、あまさず表現したすぐれた抒情歌群といつてよい。

そして結局、歌群を通して得られる磐姫像の本質は「待ちつづける女」であるといえる。女の待恋の心情を「待つ」ということばを用いて表現した相聞の歌は、新古の宮廷歌謡を収録したといわれる卷十三や、人麻呂歌集（卷十、十一、十四）にみられるが、人麻呂以降の奈良朝の歌を中心とするとみられる卷十一、十二の作者不明歌群においてもつとも例が多い。そして大伴坂上郎女、笠女郎、平群女郎、狭野弟上娘子、大伴家持ら天平期の歌人たちに至るといのがおよその流れであろう。

一において歌群を歌林編纂以降の成立と考えたが、そのことをあわせみれば、奈良朝に女の待恋の歌が多く作られたらしいことはみすごせない。磐姫歌群四首の成立も、奈良朝に想定すべきもののようにおもわれる。

さて、歌群の成りたちに、八五単独の段階と、八六―八八が加えられて四首連作が成立した段階とを想定すると、歌群のもととなった八五の検討は避けて通れない。歌群の構成上も、下三句の「山たづね迎へか行かむ待ちにか待たむ」という表現の、山中を迎えに行く相を承けて八六が、待ちつづける相を承けて八七が存在しており、八五が歌群の基幹をなすことは疑いない。そこで、以下にいくつかの方向から

良臣が類聚歌林に載す。」という八五左注は、万葉集が四首を磐姫の歌とするのに対し、歌林には八六―八八の三首はなく、八五のみを磐姫の歌として載せたことを注記したものと考えられる。「右の一首の歌は、古事記と類聚歌林と説ふ所同じくあらず。歌の主もまた異なり。」という九〇左注冒頭部は、八五左注を承け、歌林に磐姫の歌とする一首が、古事記では軽太郎女（衣通王）の歌となっていることを注記したものである。

歌林編纂の時点ですでに連作四首が成立していたとしたら、歌林に一首しか収められていないのは不審である。このような左注のありかたから、稲岡耕二氏は歌群の伝承に、八五一首の第一段階と、四首連作の第二段階とを想定する。そして、歌林に八五が蒐集された後、つづく三首がとりいれられて連作が成立したのは、歌林が編纂されたといわれる養老五年以後と推測した⁵。歌群の成りたちについては、小稿も同様の見通しに立つ。

歌林の性格は、「当時の宮廷に残されていた伝誦歌や行幸に関する歌の類聚と、その作者・作歌事情の説明」といわれる。その全貌は不明だが、同じ折りの一人の作者による歌のばあいには、数首をまとめて収載した例があったとみられる。すなわち、「額田王下⁶近江国時作歌」（巻1・一七―八）にあたる二首（一八左注による。ただし天智天皇御製歌として。）や、「中皇命⁷于紀温泉之時御歌」（同・一〇―一二）にあたる三首（一二左注による。ただし斉明天皇御製歌として。）がそれである。

ただし後者を例とすにあたっては、一二左注「右は、山上憶良大夫が類聚歌林に檢すに、曰はく、天皇の御製歌云々といふ。」の「右

の指示範囲が、一〇―一二の三首全体であるのか、一二のみであるのか
が問題となろう。そこで巻一原撰部中、「右……」の指示をもつ左注
を抜き出すと次の通りである。（括弧内は左注の指示範囲。）

- ① 右檢日本書紀……（五―六）
- ② 右檢山上憶良大夫類聚歌林曰……（七）
- ③ 右檢山上憶良大夫類聚歌林曰……（八）
- ④ 右檢山上憶良大夫類聚歌林曰……（一〇―一二）
- ⑤ 右一首歌今案不似反歌也（一五）
- ⑥ 右二首歌山二憶良大夫類聚歌林曰……（一七―八）
- ⑦ 右一首歌今案不似和歌……（一九）
- ⑧ 右案日本紀曰……（二三―四）
- ⑨ 右句々相換……（二五―六）
- ⑩ 右日本紀曰……（三六―九）
- ⑪ 右日本紀曰……（四〇―四）
- ⑫ 右日本紀曰……（五〇）
- ⑬ 右歌作者未詳（五二―三）

当該④を除いて考えると、巻一原撰部の「右」の指示範囲は、②③④のように右一首をさすことがあきらかなもののはかは、長歌・反（短）歌の組（①②③）、唱和の歌（④）、異伝関係の歌（⑤）、行幸関係歌群（⑥）のごとく複数首にわたる。そして⑦⑧⑨のように「右一（二）首歌」と歌数が明記されるのは、それがなく「右」の指示範囲が曖昧になるばあいである。したがって当該④「右」の指示範囲は、歌数指定がないことからみて、一〇―一二の三首に及ぶと解してよいと考えられる。

磐姫皇后歌の表現と趣向

八五番歌を中心に

壬生 幸子*

序

万葉集卷二の磐姫皇后歌群（八五～八八）は、集中相聞の劈頭を飾る。異伝歌の存在もあり、解釈や成立時期をめぐってさまざまな立論がなされ、問題は多岐にわたる。小稿は歌群の成りたちの一端にふれつつ、歌群の基幹をなす八五の解釈をこころみ、ついでこの歌の趣向をあきらかにしようとするものである。

一、八五左注の疑問

磐姫皇后思₁天皇₂御作歌四首

君が行き日長くなりぬ山たづね迎へか行かむ待ちにか待たむ（八五）

右一首歌、山上憶良臣類聚歌林載焉。

かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根し枕きて死なましものを

（八六）

ありつつも君をば待たむ打ち靡くわが黒髪に霜の置くまでに（八七）

秋の田の穂の上に霧らふ朝霞いつへの方に我が恋やまむ（八八）

（八九略）

古事記曰、軽太子₁奸₂軽太郎女₃。故其太子流₄於伊予湯₅也。此

時、衣通王₁不堪₂恋慕₃而₄追往時₅、歌曰

君が行き日長くなりぬ山たづの迎へを行かむ待つには待たじへここに山たづといふは、これ今の造木をいふ（九〇）

右一首歌、古事記与₁類聚歌林₂所₃説不₄同₅、歌主亦異焉。……

（以下略）

歌群が仁徳皇后磐姫（記・石之日売。紀・磐之媛）の実作でなく、後代の仮託の作であろうことは、現在では定説になっている。歌群の成立時期については大別して二説がある。一説は持統朝・文武朝にその成立をもとめるもので、そのなかには柿本人麻呂を実作者とみる論がある。他の一説は、奈良朝以降に成立をもとめるものである。

歌群の成立は、歌そのものの内容や形式などから考察されねばならないが、一方、外部にも手がかりがもとめられる。そして、その手がかりのひとつに八五と九〇の左注がある。「右の一首の歌は、山上憶

* 一般教育等